



白い薔薇と悠久の風 第二巻

藤枝たろ

そよ風が頬を撫でる。

のどかな田園風景の中、彼は馬車を走らせていた。

今まで、こんな穏やかな気持ちのまま旅を続けてきたことがあつただろうか。

「もうすぐポートセルミにつきますわね」

手綱を握る旅人の隣に座っている妙齢の美女が、柔らかい口調でそう言った。

「そ、そうですね」

「もう、あなた。敬語はやめてくださいって、何度も申しただけでしょう？」

「あ、ああ、すまない。どうも慣れなくて」

「もう、ふふっ」

そんな彼を見て、彼女はくすくすと笑う。

彼女はフローラ。

サラボナの大富豪ルドマンの娘。

そして、旅人の妻だった。

妻といつても、正式に結婚式を挙げたわけじゃない。

本当なら、あのまま黙って旅に出るつもりだったのだが、

結局はこうして、彼女は旅人の隣にいる。

フローラの格好は出会った頃の深窓の令嬢といったドレ

スとは違って、旅装束姿だった。

みかわしの服と呼ばれる特殊な製法で編まれた衣服を身にまとい、手には魔導師が持つであろう先端に宝玉のついた杖を手にかけている。

だが、その美貌と育ちのよさ、物腰の柔らかさから、とても旅の魔法使いには見えなかった。

旅人……フェズリイがポートセルミの港町へ戻った理由は、船を手に入れるためだった。

というのも、海を越えた先にあるというテルパドルという王国に、天空の兜があるという情報を入手したからだ。問題はテルパドル行き船があるかどうかだ。

近年、海の魔物は凶暴化の一途をたどっている。

比較的魔物の数が少ないとされているビスタからポートセルミへの航海だつて命がけだった。ましてや、テルパドルは外海を越えた先にある。

定期便があるとはとても思えなかった。

ならば、どうにかして船そのものを調達するしか他に方法はない。

できれば船員も確保したかったが、最悪、自分達だけで

船を操ることも覚悟しなければならなかった。

そのことをフローラに話すと、彼女は身につけていた貴金属を惜しげもなく差し出した。

「でしたら、これ売って代金の足しにしてください」

「いいのかい？」

フェズリイは商人ではないが、フローラが身につけていた腕輪や宝石は、かなり高価なものだとわかる。

「もちろんですわ。ただ輝いているだけの宝石より、あなたが旅につかう船のほうが大切ですよ」

「ありがとう。でも、俺にだって少しくらい蓄えはあるからさ。もし足りなかった時はお願いすることにするよ」

彼はこのときはそうだったが、さすがにフローラに出してもらうには気が引けた。彼女が身につけている衣服や貴金属はルドマンから貰ったものだろう。これを手放してしまえば、思い出の品がなくなってしまうのではないか。

フローラは半ば駆け落ち同然の身でサラボナを離れたが、ルドマンのことは決して嫌ってはいないだろう。

彼の父親がそうであったように、親というものは、急になくなるものだ。その時、ゆかりの品が一つでもあれば、それが思い出として永遠に残る。

そんなフェズリイの気持ちを彼女は汲んだのだろう。差し出した品を戻すと、小箱に大切に閉まったのだった。

フェズリイが密かに危惧していたのは、フローラと仲間モンスター達がはたして打ち解けることができるか、ということだった。

みな魔性は取り払われたとはいえ、モンスターであることには変わらない。

魔物に対する恐怖の念は、カボチ村の一件から嫌というほど味わったフェズリイである。

不安がないわけではなかったのだが……

「マーリン。今日も呪文の手ほどき、よろしく願いしますわ」

「わかりました。奥様」

「マーリン。わたしのことは、フローラとお呼び下さい。あなたは私の呪文のお師匠様なのですから」

……どうやら、杞憂だったようだ。

お嬢様な見かけによらず、フローラは肝が据わっているというか、大抵のことには動じない。敵モンスターとの戦いの時も、緊張こそすれど、決して臆することはなかった。だが、やはりこれまで戦闘とは無縁の生活を送ってきた彼女だ。正直なところ、戦力として数えることはできなかった。

「どうだい、マーリン。フローラの呪文のほどは」

ある日の夜、妻が寝入った頃を見計らって、フェズリイは師匠であるマーリンに尋ねたことがある。

「正直に言つて、呪文の才能はないなあ」

マーリンはいぶかしげにそういつた。

「初歩的な呪文を教えはしたのだが、どれも習得は無理そうじゃ」

「メラやギラもか？」

熱を扱うメラやギラといった呪文は、魔法使いにとつては初歩の初歩。それだけに才能のあるものならば習得は容易なはずだった。

「うむ。呪文の構成、術式の完成度はたいしたものじゃ。

だが、不思議なことに、肝心の呪文が発動しないのじゃよ」

「うーん、単に攻撃呪文に素質がないつてだけじゃないのかい？」

簡単とはいえ、誰もが扱えるというわけではない。先天的な素質が左右されるのが呪文の難しいところだ。現にフェズリイはホイミやバギといった呪文は使えるが、メラ、ギラ、ヒヤドといった呪文は覚えることができなかった。

「わしもそうだと思うつて、ホイミ、キアリーといった僧侶系の呪文も教えたのじゃが、それもダメなんじゃよ」

「でも、フローラはベホイミが使えるんじゃないか」

「そうなんじゃよなあ。そもそも、中級呪文のベホイミが使えるのに、その初歩呪文であるホイミが使えないというのもおかしい話じゃ。そんなのは聞いたことがない。しかも、フローラはベホイミの呪文を、誰にも教えられることなく、産まれた頃から使えたらしいのじゃ」

「まさか」

初級呪文は本を読むだけで習得することも可能だろう。だが、中級呪文となると話は別だ。術式の完成度や制御など、ある程度の訓練は必ず必要となる。

「それに、魔力のキャパシティもおそらくわしなんかとは比べものにならないくらいデカいじやろう。それだけに、一つの呪文が使えないというのはなあ……」

マーリンも困惑している様子だった。

「まあ、でもいいさ」

フェズリイはそういつた。

「彼女を連れ出して言うのも何だが、俺はフローラに戦つて欲しくはないんだ。彼女のか細い指に武器を持たせたり、傷ついたりする様は見たくないからね」

「フェズリイ……」

マーリンは喉から出そうになった言葉を押しとどめた。

お願いします。マーリンさん。私に呪文を教えてください。旅立ちの日、挨拶をすませるなり、そう懇願してきたの

は、他でもないフローラなのだ。

守られるだけの存在でいたくない。彼女はそんな強い精神を持った子だ。

（好き合っているとはいえ、まだお互いを理解しきれてはおらぬようじゃのう。人間の恋愛というのも、存外難しいものだな）

結論から言うと、船の問題はなんとかなった。

先回りしてポートセルミにたどり着いていたデボラが、ルドマンの言づつてを頼まれてくれていた。その内容はポートセルミに停泊している自慢の船『ストレンジヤー号』を二人に譲るというものだった。もちろん、タダでだ。

「親父にも思うところがあつたみたいよ。まつたく、自身で行けばいいものをね」

「……お父様らしいですわ」

フローラは目に涙を浮かべていた。

言葉には出さなかったが、ルドマンに黙って駆け落ちのように街を出てしまったことに負い目を感じていたのだ。

「もう勘当されたものとはばかり思つてました……お父様、ありがとう」

「まあ、今すぐは無理でしようけど、いずれ帰つてきなさい。そうね。二人の間に子供が産まれて、その子が大きく育つた時にでも、ね」

そういつて、デボラはウィンクをして二人の前から立ち去つた。

これが永遠の別れではない。そう思つて、二人は黙つてデボラを見送つたのだつた。

「子供……か」

その日はポートセルミの宿に泊まることにした。

久しぶりのベッド。さすがに人間の宿に泊まらせるわけにもいかないの、仲間達は馬車に待機している。

つまり、今ここにいるのは自分とフローラの二人つきりだ。

新妻は今、隣の浴室で入浴の真つ最中だ。

それは、サラボナを旅立つて以来、いや、一緒になつてから、夫婦として二人つきりで過ごす初めての夜だった。

子供の頃に父を失い、十二年もの間奴隷として働かされてきたフェズリイでも、どうすれば子供が出来るかくらいは、一般常識として知っていた。

だが、そのことを知っていたがために、これまで二人は

夫婦らしいことは何一つしてこなかった。

それこそ、キスすらしていなかった。

女性の扱いが未だによくわからないというのもある。だが、それ以上に自分が父親になることへの不安が勝つていた。

万が一フローラに子供が出来たとする。そうしたら、彼女は どうする。サラボナへ返すのか。それとも、一緒に旅を続ける？ 身重となった彼女にもし何かあったら……

「あなた」

思考がぐるぐると回転する中、ふと風呂から出た妻が声をかけた。

湯気でほてったフローラは、普段の淑女な彼女からは想像もできないほど艶つぽく、フェズリイは思わずドキッと心臓が高鳴った。

「あ、ああ、上がったのか。俺は、どうしようかな」

奴隸時代が長かったせいか、それとも旅人の宿命か、フェズリイにはあまり入浴する習慣がなかった。

もちろん、身体は常に清潔に保っているが。

フローラは黙ってフェズリイの隣に座る。

彼女が何を求めているのか、それがわからないほどフェズリイは朴念仁ではなかった。

彼として成人した健全な男だ。そういつたことに興味がない

いわけではないし、彼女の唇に触れたり、その華奢な身体を抱きしめたいと思ったことは、一度や二度ではない。

「あなたの考えていることは、わかります」

フローラはフェズリイの手のひらに、そつと自分の手のひらを添えた。

「私たちに子供ができたなら、そう思っているのでしょうか」

「……」

フェズリイは顔を真っ赤にして、俯く。

「安心してください。いえ、がっかりさせてしまうかもしれませんが……聞いてください」

フローラは複雑そうな顔をして、自分のおなかをさすりながら言った。

「わたし、赤ちゃんが出来ないんです」

「えっ」

驚いて、フェズリイが振り向いた。

「あっ、勘違いしないでください。わたしは、これまで一度も男性を受け入れたことはありません。修道院にいた頃です。オラクルベリーの街で流行病が蔓延した時があったんです。その時、私も街の人々の看護にあたりました」

「まさか」

フェズリイの問いかけに、フローラは頷いた。

「私もその病にかかってしまい、三日三晩生死の境をさま

よいました。幸い、一命は取り留めたのですが、かわりに……」

それ以上、フローラは何も言わなかった。

「だから、気にしないでいいんです。でも、ごめんなさい。あなたの目的を達成することができて、わたしは」

そんな妻をいてもたつてもいられず、フェズリイは彼女を抱きしめた。

自然と、フェズリイの目にも涙がこみ上げてきた。

「それを聞いて、安心なんかできるわけないじゃないか」

「……フェズリイさん」

「すまない。悲しいことを思い出させてしまって……」

俺はバカだ。こんな悲しい告白を彼女の口からさせてしまった。

「あなた……んっ」

言いかけたフローラの唇を、フェズリイは強引に奪った。ロマンもへったくれもない、はじめてのキス。

だが、フローラにとってそれは待ち焦がれていた瞬間だった。

あとは言葉はいらなかった。

一糸まとわぬ姿となった二人は、互いにぬくもりを感じ合った。今まで抑圧されていたものを解き放つかのように、熱く、ひたすら熱く絡み合う。

こうして、長い夜は過ぎていった。

翌日、無事に船を入手することが出来たフェズリイ達は外海へと舵を切った。

ストレンジヤー号はただの船ではなかった。フェズリイが水のリングを入手しにいった時に使った船と同じ、水と風の精霊の加護を持つており、船室の水晶に願うだけで自動的に航行することができる。

そのおかげで、船員を雇うことなく、彼らのみでの航海が可能となった。

もちろん、それだけで安全な航海が約束されたというわけでもない。

海に棲息する魔物にとって、外海を移動する船は格好的だった。

半魚人マーマンにしびれくらげといった魔物が、幾度となく船を襲った。

船には対魔物用のバリスタが備えられており、フェズリイはそれらを駆使して海上で対象を仕留めていた。

だが、このときは数が桁違いだった。

「甲板に上がられたっ！」

ピエールが叫ぶ。

バリスタの射撃をくぐり抜けた数匹のマーマンが、甲板

によじ登つてきた。

彼らは船の帆に攻撃し始めた。

「まずいっ！」

フェズリイは剣を引き抜くと、マーマン達に斬りかかる。だが、それは囷だった。

バリスタがやむと同時に、もう一匹、いや、もう一体の魔物が甲板に飛び降りてきた。

地響きとともに現れたのは、海の王と呼ばれる大王イカだった。

「フローラ、下がれっ！」

「いえ、わたしだつて、戦えますっ！」

フローラは魔導師の杖に精神を集中した。

火の精霊が封じ込められているこの杖ならば、念じるだけで呪文と同じ効果を発することができる。

杖から発せられた火球が、大王イカに向けて放たれた。

それはマーマンやしびれくらげ程度なら撃退できるほどの威力は秘めていただろう。だが、相手が悪かった。

大王イカはうるさいハエを追つ払うように、触手でその

火球を払いのけた。

全くダメージは受けていない。

「あっ……」

フローラは立ち止まる。

大王イカが彼女に目を向けた。

うまそうな女だ。とても言いたげに。

「しまった、フローラ！ 逃げるんじゃっ！」

マーリンは加勢しようにも、しびれくらげ達に囷まれて身動きが取れない。

無数の触手が、フローラの身体を絡め取ろうと迫る。

その時だった。

「グオオオッ！」

咆哮と共に、その触手に食らいついたものがいた。

それはキラーパンサーのブックルだった。

「ブックルちゃんっ!？」

ブックルは触手を食いちぎると、フローラの前に背を向

けて大王イカに立ちはだかった。

『やれやれ、世話のかかる嬢ちゃんだぜ』

そう思いながら、ブックルは横目でちらりと彼女を見る。

「あ、ありがとう」

『ふんっ、勘違いするんじゃねえよ』

フローラのお礼の言葉に、ブックルはぷいっと顔をそらす。

『お前さんがどうなるうが俺は知ったこっちゃやないがな。あんたに死なれると、フェズリイのやつが泣くからよ』

もちろん、ブックルの気持ちはフローラには届かない。

「プシユルルーツ」

攻撃の邪魔をされて、大王イカはうなりを上げた。
だが、ブックルも負けじと低く唸る。

『俺達の船に、きたねえなりで入ってくるんじゃねえぜ！』
ブックルは吠えた。

それは味方であるフローラすら縮みこむほどの咆哮だった。
た。

その強烈な威圧に、大王イカが思わずひるむ。その隙を
ブックルは見逃さなかった。

キラールパンサーは床を蹴ると、ものすごい早さで大王イ
カに襲いかかった。

そのまま、大王イカの急所に牙を突き立てた。

どす黒い血が吹き出る。

「プシヤグゴオオオオッ！」

断末魔の叫びを上げて、大王イカはぐらりと倒れ込んだ。
そのまま再び海に落ち、二度と上がってはこなかった。

ブックルの咆哮に戦意を喪失したのは、マーマン達も同
じだった。

彼らは散り散りに逃げていき、甲板の上にはフェズリイ
達だけが残された。

ブックルは一人、血と墨に塗れた毛をブルブルと振るっ
て見せた。

「あの、ブックルちゃん」

戦いの後、フローラは桶に水を汲んで、甲板の上に一人
佇むブックルの元へとやってきた。

助けてくれたお礼に、その汚れた毛を洗ってあげようと
思ったのだが、彼は意に帰さず、ペロペロと自らの毛を舐
める。

恐る恐る手を伸ばそうとする。その時だ。

ガウツ、とブックルはフローラに吠えた。

それは威嚇に近かった。

きやつ、とフローラは尻餅をつく。

船の上では水は貴重だ。そのことを理解していないプ
クルではなかった。

だが、フローラは別のことを思ったらしい。

「ごめんなさい。まだわたしのこと、認めていないのね」

その問いかけに、ちらつとブックルは目を向ける。

「聞いたわ。あなたとフェズリイさん、それから、ピアン

カさんのこと。わたしは二人、いえ、三人の間に割って入っ
てきたも同然なものね。あなたが心を許さないのもわかる
わ」

「……」

その独白を黙って聞く。

「でも、それでも、わたしはあなたと仲良くしたいと思っ
ているの」

そういつて、フローラはブックルに手を伸ばす。

その手はガクガクと震えていた。

無理もない。ピエールやマーリンは人間とほとんど変わ
らないが、目の前の生き物は地獄の殺し屋の異名を持つキ
ラーパンサーだ。

しかも、先ほどの咆哮と戦いを見てしまえば、恐怖で竦
んでしまうのも無理からぬ話であった。

『やれやれだぜ』

ブックルは起き上がると、ぶいっとフローラから背を向
けて歩き出した。

『俺のご主人はフェズリイとビアンカだけだぜ……今のと
ころはな』

フェズリイ達がポートセルミから旅立って、三ヶ月が過
ぎようとしていた。

南の大陸、テルパドール。

大陸のほぼ大半が砂漠で覆われている土地だ。昼間は灼
熱の太陽が大地を焦がし、反対に夜は凍てつく冷気が全て
を凍らせる、人が暮らすにはあまりにも過酷な環境だった。
フェズリイ達は大陸の北側から上陸した。幸い、ここか
らなら、王都まで数日ほど到着することができる。
しかし、正直なところ、フェズリイは砂漠の旅を甘く見
ていた。

熱砂の砂漠は、容赦なく体力を奪っていく。

くらつと、目の前がぐらつく。

いかん……

フェズリイはこらえきれず、水筒の水を口に含んだ。

砂漠において、水は貴重だ。とはいえ、水分補給を我慢
して脱水症状で倒れては元の子もない。

自分ですらこのザマなのだ。フローラは……

ちらつ、と妻を見る。

フローラも額に汗を浮かべているが、自分より余裕があ
る様子だった。

少なくとも、足取りはしつかりしている。

「あなた、あの岩陰で少し休みましょう」

フローラは自分が休みたいからではなく、夫の身を氣遣っ
て提案した。

反対する道理は見当たらなかった。

砂漠の大地に突き出た巨大な岩陰は、太陽の日差しから身を隠すにはうつつつげだった。

座り込んだフェズリイに、フローラは何やら茎のような植物を持ってきた。

「あなた。口を開けてください」

「あ、ああ」

フェズリイは言うとおりにする。フローラは茎をナイフで切った。すると、大量の水滴があふれ出した。

うまい。体中に染み渡ってくる。それだけではない。疲れも幾分吹っ飛んだみたいだった。

「ありがとう。助かったよ。けど、どこからそんな知識を？」
「砂漠に住む民なら、誰もが知っていることですわ」

フローラはにっこりと微笑んだ。

「テルパドールは、私が産まれた地ですから」

「え？」

驚いてフェズリイは聞き返した。

「私と姉さんは、この地でルドマンお父様に拾われたのです。私も姉さんも、この土地の孤児院で育ちました。父は

その孤児院の出資者で、それで私達を見初めたのです」

「そうだったのか」

フェズリイにとつて、それは初耳だった。

「なるほど。通りで砂漠の旅に慣れているはずだ。俺はその逆さ。サンタローズは寒冷地だからなあ。正直、この暑さには堪えるよ」

「まあ」

らしくないフェズリイの弱音に、フローラはくすくすと微笑んだ。

それから三日。

フェズリイ達は予定通り、王都テルパドールにたどり着いた。

そこは石と粘土を固めた家が立ち並ぶ。異国情緒の漂う街だった。

「あれが王宮か」

テルパドールの城は、オアシスの真ん中に経っていた。砂漠の街ながら、そこだけは緑に囲まれており、体感的に温度が違う。

この街の酒場で、フェズリイは天空の兜の詳細な情報を得ていた。

この国は元々、勇者の仲間の一人である占い師ミネアが

興したものだ。アイシスはそのミネアの子孫であり、この国には代々家宝として天空の兜が祭られてきたのだという。

「国宝つてやつですか。これまた、厄介ですな」

ピエールが首をかしげた。

「一介の旅人に譲ってくれるとは思えませんが」

「その悩みは今回で二回目だな。一回目は」

「ふふつ、そうでしたわね」

フェズリイが背負っている天空の盾を横目に、フローラは笑った。

「うーむ。どうしたものかのう。そうじゃ。フェズリイがこの国の女王と結婚すればよいのじゃよ。そうすればおのずと兜も……」

そう言いかけて、マーリンは言葉を引つ込めた。フローラは笑いながら、

「それは名案ですわね。いつそのこと、マーリン様がアイシス様に求婚なされたらいかがかしら」

「う、うう、すまぬ」

マーリンはしゅん、と縮こまる。

「やれやれ」

ピエールとフェズリイは呆れながら肩をすくめた。そんな時だった。

門番らしき男達が、フェズリイ達に近づいてきたのだ。

「なんだろう」

「怪しいやつと思われたんじゃないのか？」

ひそひそと話していると、

「失礼。あなたはフェズリイ殿ですか？」

突然、門番の口から自分の名前が出たことに、フェズリイは驚いた。

「そ、そうですが、どうして私の名前を」

「やはりそうでしたか。いやはや、アイシス様の予言は本当によく当たる……」

門番が言うのは、アイシス女王が今日、予言を告知したというのだ。

紫のターバンを頭に巻いた、黒髪の旅人が訪れるであろう、と。

「なぜアイシス様がそのような予言をなさったのかはわかりません。ただ、旅人が私を訪ねてくるから、城へ案内するようにと……」

「どうします。フェズリイ？」

「願ってもないことじゃないか。断る理由はないよ」
フェズリイは二つ返事で了承した。

フエズリイ達は城の内部へと案内された。

てつきり女王の玉座があるという二階へ通されるものと思つたが、彼らを通されたのは地下だった。

「おい、まさかいきなり牢屋に放り込まれるなんてことはないだろうな」

「マーリン、失礼なことを言うもんじゃありません」

ピエールがすかさず注意する。

「じゃがのう。なんでこんな地下に……うおつ」

不平を述べていたマーリンだったが、次に目にした光景にそんな気分は吹っ飛んでしまった。

そこはさながら、海底に作られたオアシスだった。

ヒカリゴケが樹勢しているため、地下なのに部屋は明るく、樹木が生い茂り、さらに至る所に水路が張り巡らされている。

「こいつは驚いた。さながら海底の楽園じゃないか」

「驚いたでしょう。ここはテルパドールの水源を利用して作られた海底のオアシスです。この抱負な水があるために、この国は砂漠にありながらこうして繁栄できたのです……アイシス様。フエズリイ様をお連れしました」

「ご苦労でした。下がってよろしい」

テラスで優雅にお茶を飲んでいた女王が、すつと立ち上がった。

砂漠の民に似合わぬ、透き通るような白い肌に、琥珀色の髪をした、不思議な雰囲気を持つ美女がそこにいた。

「はじめまして。フエズリイ。私がこの国の女王アイシス・テルパドールです」

「お会いできて光栄です。女王陛下」

フエズリイは両手を胸に、片膝をついて挨拶した。

フローラやピエール達もそれに習う。

「実は、私達がテルパドールへやってきたのにはわけがあります。それは」

「わかっています。天空の兜のことでしょう」

フエズリイは驚いた。まるで心の中を見透かされているかのようなだ。

「あなたの欲している兜は、ここにありません」

アイシスはすつと彼の前に差し出した。

それは、兜というより、サークレットに近いリング状の防具だった。

白と碧の、見たことのない金属で作られたそれは、紛れもなく天空の兜に他ならなかった。

「天空の兜は、代々我が国の家宝として祭られてきたものです。そして、こんな言い伝えがあります。この兜を身につけし選ばれし者に、これを渡さん……と」

そういって、アイシスはフエズリイの手に兜を乗せた。

「さあ、かぶつてみてください」

「……」

フェズリイはそつと兜を受け取った。

天空の剣は、自分には使うことができなかった。持ち歩くことはできても、いざ武器として使用しようとする、剣は鉛のように重くなるのだ。

天空の盾も同様だった。

フェズリイはたぶんダメだろうな、と思いながらも、兜を被った。

ダメだ。重たすぎる……！

たまらず、フェズリイは兜を脱いだ。

「やはり、ダメでしたか」

アイシス女王は落胆した様子だった。

「私が予知夢を見ることなど滅多にありません。もしや、天空の勇者様が復活なされたのではないか、と期待したのですが……」

「復活？ それは、どういう意味ですか」

フェズリイは疑問を投げた。

確かに、フェズリイは天空の勇者のことについて、何も知らない。魔王を倒して、その後どうしたのか。そのあたりがすっぽりと抜け落ちているのだ。

「あなた方が知らないのも無理はありません。天空の勇者

様は、デスピサロを倒した後、いずこかへと消え去りました。共に戦った仲間達にも告げずに。正直なところ、子孫がいるのかすら、わかっていないのです」

「そんな……」

もし、勇者が子孫を残さないまま死んでいたら。その血統が途絶えていたら。

フェズリイはそのことについて、考えたことすらなかった。

「あなたは確かに勇者ではありませんでした。しかし、どこか不思議な力を感じます。普段人間に決して懐かない魔物が、なぜあなたには従っているのかも。フェズリイ殿。あなたの心を、覗かせてはくれませんか」

「えっ」

返事をする間もなく、アイシスはフェズリイの頬に手を添えた。

フローラが一瞬、びくつと驚いた。

しばらくの間、沈黙が流れた。

やがて、アイシス女王は手を離した。

「なるほど。だいたいのはわかりました。あなたはズいぶんと、数奇な運命に翻弄されてきたのですね。それに、光の教団……まさか魔物が影で暗躍していたとは」

驚いた。本当に心を読むことができるとは。

「光の教団のことをご存じのですか」

「この国でも近年、信者が増えていますから。おそらく、魔物の凶暴化も、光の教団が仕組んでのことでしょう。教団に入れば、破滅から救ってくれる、そんな甘い言葉の裏には、そのような裏があつたのですね」

「そうです。私は光の教団を倒すため、そして、父パパスの仇を討つため、魔界に捕らわれているという母を救うため……そのために、天空の勇者を探しているのです」

もう隠す必要もない。フェズリイは胸の内を全て女王の前にさらけ出した。

「そうですか。だとすれば、おそらく、天空の勇者の子孫は生きている、と考えてよいでしょう」

「そ、それは本当ですか!」

「光の教団は、子供を次から次へとさらっているのです。おそらく、勇者の子孫を探しているのだと思います。これは私の勘ですが、敵の中にも私と同じ、いえ、それ以上の予知能力を持つ者がいるのでしょう。その者が預言したのだと思います。勇者は高貴な血統から生まれてくる、と。逆に考えれば、まだ勇者は無事、ということにも繋がります」

「そ、そうかつ!」

フェズリイは顔を上げた。希望はまだ潰えてはいなかった。

た。

「そして、あなたに告げなければならないことが、もう一つあります」

「え?」

アイシス女王はわずかに表情を曇らせると、一枚の紙を手渡した。

驚いたことに、それは実に正確な絵だった。まるで現実を切り取つたかのような写実感に、フェズリイはもちろん、フローラも目を見張つた。

「これは写真というものです。私の遠い祖先である、錬金術師が発明したとされる、現実の光景を切り取つて保管する装置です。そして、これが撮られたのは、今から二十年以上前のことです」

そこに写っていたのは、若いが、確かに父パパスだった。その隣にはアイシス女王に、今はもう亡くなったラインハットの国王、そして、商人らしき男も一緒に写っている。

「お、お父様つ!」

「えつ」

フローラが驚きの声を上げた。

「そう。その男性はあなたのお父様、ロバート・ルドマンです。ふふつ、あの頃はまだ痩せてハンサムでしたね」

そういつて、アイシス女王はくすつと笑つた。

フェズリイはパパスの隣に立つ、もう一人の女性に目を奪われていた。

長い黒髪の、巫女のような衣服を身にまとった美しい女性に、パパスに肩を寄せて立っている。

「そのかたが、あなたのお母様、マーサ様です」

「お、俺の、母さん……っ！ この人が」

アイシスは語った。

今から二十年前、諸国漫遊の武者修行の旅をしていたパパスの身に起こった、様々な事件のこと。その事件をきっかけに、アイシス、前ラインハット王、ルドマン、そしてマーサは知り合い、生涯の友となった。

この写真は一行が別々の道を歩み、もう会うこともないだろう、という別れ際に撮った記念写真だった。

「あなたには告げなければなりません。あなたのお父上の秘密を」

「俺の父さんの、秘密ですって」

そうだ。思えば、俺は父について何一つ知らない。

どこで産まれたのか、今まで何をしていたのかすら。

「あなたのお父上の本当の名前は、パルバドス・グレンゾー
ン・フォン・グランバニア」

「えっ、グランバニアって、東の王国の名前じゃ」

フローラが驚いて口を塞ぐ。

「そう。パパスはグランバニアの国王となる人でした。つまり、フェズリイ。あなたは、グランバニアの第一王子なのですよ」

それは衝撃的な事実だった。

父がグランバニアの国王？ そして、俺が、王子？

驚きのあまり、思考が追いつかない。

「あなたの持つ形見の剣が、何よりの証拠です。その鷲の紋章は、グランバニア王家の紋章に他ならないのです……」

アイシスはそう断言したのだった。

「グランバニア、か」

アイシス女王との謁見を終え、宿に帰ってきたフェズリイは、一人物思いにふけていた。

「今はそつとしておいたほうがいいでしょう。心の整理がつくまで」

ピエールのいうことももつともで、フローラは一人テラスで過ごしていた。

すでに日は落ち、空には巨大な月が上がっている。

砂漠の夜は冷える。カーデイガンを羽織っているが、さすがにそろそろ部屋に入ろうか、と思った時だった。

カツツ、と何かが当たる音が聞こえた。

ここは二階だ。ということは、下から？

フローラは下を覗くと、そこにはローブを羽織った女性の姿があった。彼女が小石をわざと壁にぶつけて、自分のことを知らせたのだ。

そして、彼女は紛れもなく、先ほど出会ったばかりのアイシス女王だった。

「女王さまっ！」

フローラは慌てて宿の外に出て、待っていた女王の前までやってきた。

「いったいどうしたのです？ お城を抜け出して」

「ふふっ、わたしとしたことが、言い忘れていたことがありまして」

「言い忘れていたこと？ だったら、私よりフェズリイさんに」

「いえ、私が用があるのは、あなたです。フローラさん」
彼女の目をまっすぐ見据えて、アイシスは言った。

「わたし……に？」

「ここじゃ人目につきますから、少し歩きませんか」

そういつて、女王はくるつときびすを返して歩き出した。

アイシスが訪れたのは、街の中央にある噴水広場だった。

二人はそのテラスに腰掛けた。

街灯があるにせよ、すでに周囲に人はなかった。

「フローラさん。あなたはたしか、この国の出身でしたよね」

「は、はい」

「その前は、どこにいたか、覚えていますか」

「いえ、私と姉は物心ついた時から、この街の孤児院に預けられたらしいのです。シスターがいうには、私は戦災孤児だったと」

「……なるほど。ここからはるか東に、魔物に滅ぼされたという集落がありました。おそらくあなたは、その出身だったでしょう。地図にも載ってないほどの、小さな集落を、なぜ魔物が襲ったのか、疑問に思っていたのですが……」

「もしかして、アイシス様は私が天空の勇者の子孫とお思いなのですか？」

フローラは驚いてそう尋ねた。

「確かに、天空の盾は幼い私と共にあつたといいます。け

ど、私は勇者ではありません。私も天空の盾は装備できませんでしたし」

「ええ、わかつています。でも、わたしはあなたにはフェズリイ殿とは違う、別の力を感じるのです。いえ、あなたというより、あなたの中から、とでも言えばよいのでしょうか」

「女王陛下？ いったい、何を」

「しっ、動かないで」

女王は先ほどフェズリイにした時のように、フローラに手をかざした。

小さく呟いて、呪文をかける。

すると、フローラの身体が一瞬だけ、まばゆく光った。

(これ、回復呪文？ いえ、違う。でも似たような感覚……)

がくつ、と女王は肩を落とした。

「じよ、女王陛下っ！」

驚いて、フローラは彼女を支える。

女王は疲弊したかのように、肩で息をしていた。

「これは、私からの、せめてもの贈り物です。あなたの力は、まだ眠っている。けど、その力、きつとフェズリイ殿の力になるはず」

女王が何をいつているのか、フローラには分かりかねた。だが、女王は自分のためにまじないをかけてくれたとい

うことだけはわかった。魔力を消費してしまうほどの力で。

「私には見えます。あなたの中に生まれる、二つの希望……その希望を、決して潰してはなりません」

それだけ告げて、女王は去って行った。

フローラは何も言えずに、ただその後ろ姿を黙って見守るだけだった。

「グランバニアへ行くと思う」

船につくなり、フェズリイは皆にそう告げた。

やっと迷いが晴れた、といった顔をしていた。

いや、正直まだ迷っている。だが、父の故郷を見てみたという思いは、日増しに強くなっていった。

「じゃが、海路でグランバニアへ行くことはできぬなあ」

世界地図を広げて、マーリンは唸った。

「グランバニアは周囲を山々に囲まれた天然の城西国家じゃ。そこへ行くには、東の大陸の南部から上陸し、さらに険しいチゾット山脈を越える必要があるぞ。残念じゃが、船は置いていくしかないな」

「そうか、こないだいい船なのに、残念だ」

フェズリイは船の甲板を大事そうに撫でた。

「問題はチゾット山脈の方じゃ。おそらく、これまでの冒

「険の比ではあるまい」

「そんなに険しいのか」

「うむ。もともと、外国との交流のない国じゃからな。整備された山道などないからのう。一応、二つのルートがある。一つは文字通り山越えじゃ。じゃが、あまりオススメはできん。足場の悪い断崖絶壁を、落盤にさらされながら登るんじゃぞ。ピエールやおぬしならともかく、体力のないわしや女のフローラには荷が重すぎる」

「それじゃあもう一つのルートというのは」

「チゾット内部に出来た天然の洞窟を通るルートじゃ。古来から旅人が使っていたとされている。こつちも険しいことは険しいが、まだ現実的じゃろう。もつとも、近年では魔物の凶暴化により、ここを通る旅人もめつきり減つてしまったようじゃしな」

「選択肢は実質一つだけのようだな。わかつた。その道でいこう。いいね、フローラ」

「もちろんですわ。私はあなたの決定に従います」

フローラの彼との冒険を経験して、少しは体力に自信がついてきたようだった。フェズリイ本人も、フローラなら大丈夫だろう、と見通してのことだった。

だが、その見通しが間違いだつたことを、彼らはのちに知ることとなる……

チゾットの山越えは、予想以上に険しいものだった。

洞窟内は天井からしたたりおちる水滴のせいで足場が悪く、さらに登ったり下つたりの連続で、予想以上に体力を持つて行かれる。

しかも、洞窟内は予想以上に魔物の巣窟と化していた。ヘビコウモリの上位種リントブルムや、ムササビとアヒルのキメラダックカイト。獣人オークといった凶暴な魔物が跋扈している。

それに引き換え、こちらはフローラをかばいながら戦わなければならない。いくら治癒呪文でサポートができるとはいえ、回復しかできない自分の力のなさを、フローラは今更ながら実感せざるを得なかった。

「ごめんなさい。あなた。私がせめて攻撃呪文でも使えれば」

「フローラ。謝るのはなしだ」

フェズリイは優しく、彼女の頭にぼんと手を乗せた。

事実、彼はフローラのことをちつとも重荷に感じていなかった。むしろ彼女を守ろうと思えば思うほど、疲れも吹っ飛ぶ。

「愛の力というわけですな」

「ピエール。おぬしたまに真顔で恥ずかしいことを口にするのう」

「ガウ(まったくだぜ)」

呆れたようにマリーンとブックルが同調する。

しかし、フローラ自身はやはり納得していない様子だった。

「やはり私も前線に加わるしか。旅立ちの日に持つてきたモーニングスターがあれば、私だつて」

「いや、それは遠慮してくれないか」

控えめにフェズリイはその提案を却下する。

(あんな鉄球を振り回すフローラは、見たくないしな)

洞窟内へ入って、すでに丸二日が経過していた。

一行の疲労度はピークに達していた。無理もない。絶えず魔物が襲ってくるこの洞窟内では、ろくにキャンプすることもできない。

見張りを立てて短時間の仮眠を取るのが関の山だった。

フローラの顔色は、特に悪い。

必死についてきてはいるが、言葉数は少なくなり、隊から遅れがちになることもしよつちゆうだった。

「うっ……」

フローラがお腹を抱えてうずくまる。

「フローラ、大丈夫かっ！」

フェズリイが彼女に駆け寄る。フローラの顔は顔面蒼白だった。

額に手をやる。

少し熱があるみたいだった。

「残念だが、ここまでだな。リレミトで脱出しよう」

「まって、待つて下さい。あなた」

フローラがすがるように夫の腕を掴んだ。

「わたしなら、大丈夫です。だから、いきましよう」

「何を言っているんだ。もう限界じゃないか。君はよくやつたよ」

「でも……せつかく、ここまで来たのに」

「君にもしものことがあつたら、ルドマンさんに申し訳が立たない。いいんだよ。グランバニアは、いつでもいけるさ」

「あなた……」

フローラは悔しさを唇を噛みしめた。

その時だった。

「フェズリイ、待つて下さい！」

何者かの気配を感じ取つて、ピエールが声をかけた。

たしかに、かつ、かつ、と暗闇から足音が響いてくる。

「魔物か……最悪の状態じゃな。わしも魔力が尽きかけておるし」

「わたしが時間を稼ぎますから、その隙にフェズリイはリレミトの詠唱をお願いします」

そういつて、ピエールが剣を構える。その時だった。

「なんじやい。旅人とは珍しいのう」

驚いたことに、投げかけてきたのは人語だった。

暗闇から姿を現したのは、背の低い老婆だった。

「わかい男女にスライムナイト、それにキラールパンサー、あとはじじいか」

「だ、だれがじじいじゃ！ おまえだつて、ばばあじゃろうにっ！」

ついで扱いで、しかもじじい呼ばわりされてマーリンが激昂する。

「まあまあ、マーリン、落ち着いて」

ピエールはマーリンをなだめたが、まだ剣を納めはしな

かった。彼女が敵じゃないと決まったわけではない。

「ふん、年寄り相手にそんなぶつそうなもんを向けるとは、

礼儀がなつてないのう。それでもスライム「ナイト」かね」

「うっ……」

そう言われて、ピエールは仕方なく剣を鞘に収めた。

「それでいいんじや」

うんうんと老婆は頷いた。

「おばあさん、あなたは？」

「わしはこの洞窟で一人で住んでいる、ただの山姥じゃよ」

「こんなところに一人で……魔物は大丈夫のですか」

「ふえつふえつふえ、こんなばあを食ったところどうま

くはないつてことは、魔物だつてわかっているらしいわい。

それよりも、そつちのお嬢ちゃん、だいぶ顔色が悪そうじや

のう」

山姥はフローラの容態を見るなり、くいつと杖を向けた。

「ついてこい。わしの寢床に案内してやる。あそこなら魔

物も襲つてはこない」

「えっ、し、しかし」

言い淀むフェズリイだったが、老婆は返事を待たずさつ

さと先に行つてしまふ。

仕方なく、一行は老婆の後に続くことにした。

老婆の家……というより、洞窟の開けた空間といった感

じだが……は、確かに家らしく家具やベッドが置かれてい

た。

ベッドは埃一つなく、床にはゴザが引かれており、意外

なほど清潔である。

「そのベッドに娘さんを寝かせい。わしがいま、薬を持ってきてやる」

「あ、ありがとうございます」

フェズリイは困惑しながらもお礼を言った。

しばらくすると、老婆は粉薬と白湯を持ってやってきた。

「薬草を乾燥させたものをすりつぶした気付け薬じゃ。よく効くぞい。ちよつと苦いがな」

そういつて、老婆は茶目つ気らしくウインクした。

本当に飲んで大丈夫だろうか、とフェズリイは一瞬不安になった。

だが、フローラは素直にその薬を受け取ると、白湯と共にそれを飲み干した。

やがて、彼女はすやすやと寝息を立てた。

「おばあさん、ありがとうございます」

「まあ、いつてことよ。ここを通る旅人も、近年めつきり減つちまつたしな」

「おばあさんはここでずっと一人で暮らしているのですか？」

「そうじゃな。一万年くらいかな？」

「い、一万年っ!？」

「なーんてな、嘘じゃよ。ふえつふえつふえ」

老婆は欠けた歯を浮かべて笑った。

「さて、おぬしもそろそろ寝たらええ。洞窟内で暗くてわからんが、もう寝る時間じゃしな」

「え、ええ」

まだ完全に信用したわけではないが、積み重なった疲労と眠気には勝てず、フェズリイもやがて夢の中へと落ちていった。

ハツ、とふいにフェズリイは目を覚ました。

嫌な予感……彼の長年の戦士としての勘が、危険を告げていた。

身を起こそうとしても、なんとということだ。身体が動かない。まるでしびれ薬を入れられたかのように。

隣に寝ているフローラは、ダメだ。完全に寝入ってしまった。意識がない。

そういえば、聞いたことがある。

山奥で旅人が一晚の宿を求めていたところ、年老いた老婆が彼を自分の家に招き入れた。

だが、それは罠であり、その老婆は恐るべき食人鬼だったのだ。

その時はよくある昔話だと思っていたが、まさか、自分がその旅人の立場になるとは。

「しゃあ、しゃあ、しゃあ、と何か刃物を研ぐ音が隣の部屋から聞こえてくる。それがやけに不気味だった。

やがて、音がやむと、老婆がぬらりと姿を現した。

「なんじや、目を覚ましておるわ。葉が効かなかつたのかのう」

「あ、あ……」

ダメだ。言葉が発することができない。

「まあええわい。ほおれ、こいつを見てみい」

老婆はフェズリイの眼前で、すらりと伸びた剣を掲げた。

それは父の形見の剣だった。

老婆が先ほどまで研いでいたのは、自分の刀だったのか。

「こいつはええ剣じや。どおれ、試し斬りでもしてみるかろう。ふえつふえつふえつ！」

そういつて、老婆は剣の切っ先を寝ているフェズリイに向ける。

……だめだ、やられる！

そう悟った時だった。

なんと、老婆はその剣で剥き始めたのだ。

リングを。

「おおおお、こりやあよく切れるわい。それなのに、まったく。おぬし、剣の手入れがなっていないぞい。刃こぼれはしどるし、第一、使い方が荒いつ！ おぬし、ただ叩つ切

るように剣を使っておるな。それではダメじや。名刀が泣くぞ」

「うっ……」

突然の老婆の説教。ただ、よく聞けば彼女の言う通りだ。剣術に関しては自分は我流だ。しかも魔物が相手なので、腕力任せに叩つ切ることがほとんどだった。

思えば、形見の剣を入手するまで、剣の消耗度はけっこう多かつたように思える。

「ま、ええわい。まだ夜も明けておらぬし、おぬしはゆっくり寝るがよからうて……」

そういつて、老婆はふえつふえつふえと笑いながら立ち去っていった。

次の朝。

老婆の姿はどこにもなかつた。

ただ、見事に研がれた形見の剣だけが、丁寧に置かれていた。

のちの聞いた話だが、チゾットの洞窟には山の神が住んでいるという伝説がある。

古来、グランバニアの刀鍛冶達は山の神を刀の神と称え、

チゾットの山脈に剣を納めることを慣わしとしていたという。

だが、その信仰もすでに途絶え、今、その伝承を知る者は少ない。

あの老婆は山の神だったのだろうか。

今となっては確認する術を知らない。フェズリイ達は感謝の念を込めて、ゴールドの入った袋を置いていくと、再び旅立った。

山姥の家を旅立つて半日。

目の前に、数日ぶりの日の光が差し込んできた。洞窟の出口だ。

長かったチゾット山脈への洞窟がようやく終わったのだ。外を出ると、一行を出迎えたのは雪化粧された大地だった。

そこはかなり標高の高い頂だった。

眼下には海と大陸がパノラマのように見渡せる。

「きれい」

その絶景に、フローラは見とれた。

それから半日。一行は山脈を少し下ったところにある、チゾットの村へとたどり着いた。

すでに空はあかね色に染まっていた。

「おんや、旅人とは珍しいねえ」

フェズリイ達の姿を見かけた村の若者が話しかけてきた。「こんにちは」

フェズリイは返事を返す。よかった。この村はカボチ村とは違って、旅人に友好的なようだ。

もともとこの村は、チゾット山脈を越えてきた旅人の宿場も兼ねていたから、その名残だろう。

「宿を探しているのですが」

そう尋ねようとした時だ。

どさつ、と誰かが倒れる音がした。

振り返ると、フローラが力なく地面に突っ伏していた。

「フローラッ！」

愕然として、フェズリイは彼女に駆け寄る。

フローラの顔色は、顔面蒼白だった。油断していた。まだ病み上がりだった彼女に、無理をさせるべきではなかった。

「こりやあ大変だつ、いま村のものを集めてくるから、あんたはそこにいろっ！ 担架も持つてくるでなっ」

しばらくすると、立派な体つき若者数人がやってきた。彼らの手厚い看護の元、フローラは一軒の小さな宿へと担ぎ込まれた。

「もう入っていいですよ」

診断のため閉め出されていたフェズリイ達は、許可が出たので部屋の中に入った。

チゾットの村で唯一の医師は、かなり高齢の男性だった。

「先生、どうですか。妻の様子は」

「ああ、それなんじやが」

先生が何か言いかけた時だ。フローラが彼の袖を引っ張った。

わかっておると、とフェズリイ達には聞こえないくらいに、小声で言う。

「おそらく、過労じゃろう。まったく、こんな華奢な女性に旅をさせるだなんて、無茶が過ぎますぞ。足にもママが出来て、しかも潰れておる。しばらくは安静が必要ですよ」

「申し訳ありません」

「それは奥さんに言っておけることですよ。今日明日はゆっくり静養するように。では、私はこれにて」

そう言つて、医師は謝礼を受け取ると立ち去った。

二人つきりになると、フェズリイは彼女の手を取る。

「すまなかった。もつときみの身体を気遣うべきだった」
やはり、フローラにこの旅は過酷すぎた。

それはわかっていたはずなのに、彼女と離れたくないという思いを優先してしまったのは確かだった。

「謝るのはわたしのほうです。足手まといにならないって言っておきなから……」

まだ熱があるのか、フローラは意識がもうろうとしているようだった。

「あなた、わたし……」

「今日は何も考えなくていい。今はゆっくり休むんだ。いいね」

「……はい」

フェズリイは最後にフローラの唇にそつと自分の唇を寄せた。

「あなた」

「ん？」

「愛しています」

「俺もだ」

急な告白にいささか面食らったが、フェズリイは優しく頷くと、その場を後にした。

残されたフローラは、そつと自分のお腹を撫でた。

本当に言わなくてもいいのかな？

医師の最後の言葉が、フローラの脳裏に響く。

「できないと思っていたのに……」

このことを告げたらフェズリイはどう思うだろうか。

喜ぶ？ それとも、困惑する？

いや、きつと困らせてしまうかもしれない。

「ごめんね。もう少しだけ許して、まだ、あの人と一緒に旅がしたいから……」

フローラは自分の中にできつつある、新たな命に向けてそう語りかけた。

結局、チゾットには三日間滞在した。

その間、フェズリイはグランバニアの情報を入手することができた。

グランバニアは周囲を山々に囲まれた小さな国だ。

歴史は古いが、ラインハットと違い、外国との交流はほぼない。人口も数千人といったところで、辺境の小国のイメージの通りだ。

だが、かつてグランバニアは傭兵を生業としていた時代があり、自国で鍛え上げた兵士達を外国に派遣し、莫大な

富を築いていたという。

今ではそのようなことはなくなったが、その名残からか、グランバニアの兵士達はみな屈強で知られ、今までの部族の侵略も許したことがない。

そして、パパス王の話も知ることが出来た。

バルバドス・グレンゾーン・フォン・グランバニアは近年まれに見る名君だった。

内政においても税を公平に分配し、前王時代にはびこっていた汚職や宮廷内の腐敗を撲滅。

屈強な戦士としても知られ、彼の手により、多くの魔物の巣が破壊され、魔物の脅威にさらされていたグランバニアを救った英雄でもあった。

しかし、その名君が二十年前、突如として退位を表明した。

妃となったマーサが、何者かに誘拐されるという事件が起こったのだ。

その日、王子の誕生で民衆が喜びに沸く中、突如魔物の大群がグランバニアを襲った。

この時の戦闘で、グランバニアの兵士や民に大勢の犠牲者が出たという。

そして、魔物によってマーサは連れさらわれてしまった。元々素性の知れないマーサを妃に迎えることに反対する

者も多かった。現グランバニア大臣もその筆頭であり、パスはマーサを連れ戻すため、そして、自国に多大な被害が出たその責任を負うために退位し、赤子だった息子を連れて旅立ったという。

「母さん……か」

フェズリイは自分の母の顔を知らない。それどころか、母が何者なのかすら分かっていなかった。

母のことを知れば、母に繋がる何らかの手がかりを得ることができるとも思えない。

やはり、グランバニアに行く必要がある。

幸い、このチゾットの村を下れば、グランバニアは目と鼻の先だ。

フローラとの旅も、そこで終わりにしよう。

彼女はグランバニアに置いていく。もちろん、従者としてピエールかマーリンを付けるつもりだ。

彼女と離れるのは正直、辛い。だが、彼女の身を思えば、こうすることが最善の方法に違いなかった。

チゾットの村を旅立って数日が経った。

「これがグランバニアか」

目の前にそびえたつ、要塞のような巨大な建造物。都市そのものを城塞で覆ったこの城こそ、グランバニアの王都だった。

城塞都市の異名の通りだ。パパス王の時代も幾度となく魔物が襲撃してきたが、この城塞が破られたことはなかったという。マーサの誘拐時の、例外を除いて。

「ここがあなたの産まれた国なのね」

馬車の中から、フローラが顔を出す。

やはり彼女の顔色は優れない。

本当に旅の疲れだけだろうか。妻のためにも、フェズリイはできるだけ早いうちに、この国の居住権を得なければと思った。

「旅人かね」

門番の男達がフェズリイに話しかけた。

「はい。通してもらっても構わないでしょうか」

「残念だが、グランバニアは今、外国との交流を絶っている。従って、何人なりともよそ者を場内に入れるわけにはいかん。そう、大臣様より固く言いつかっておる」

大臣……？

現国王は確かオジロンといったが、国王の名ではなく、大臣からとは。

「お願いします。妻が具合が悪いのです。せめて、数日間滞

在するだけでも」

「気の毒だが、お帰り願おう」

門番は頑として譲らない。

せつかくここまで来たのに。

フェズリイは唇を噛みしめた。だが、ここで足掻いたところでどうしようもない。

諦めようとした、その時だった。

「どうなされた？」

ふと、聞き覚えのある声があったような気がした。

そう、遠い昔に、どこかで。

「おお、サンチョ殿か」

サンチョ？

まさか……！

フェズリイは驚いて振り向いた。

そこにいたのは、恰幅の良い初老の男性だった。

自分の思い出の姿より、いささか老け、髪に白いものが

混じってはいるが、間違いなかった。

「サンチョ……かい？」

「ん？ どうして旅の方がわたしの名前を」

サンチョはいささか疑問に思ったが、青年の目を見て、

ハッと驚いた。

驚きのあまり、手に持っていた山菜の入った籠を落とす。

「ま、まさか、そんな……あなたは、フェズリイぼつちやんっ!」

「あ、ああ、そうだよ！ 僕だよサンチョ!」

フェズリイは自分でも知らないうちに、子供の頃に使っていた僕という一人称を使って、彼に呼びかけていた。

そう、彼はサンチョ。かつて父パパスの召使いとして、共に暮らしていた。自分にとつても、サンチョは母代わりとも言わなければならない。

「ああ、神よっ！ 今日は何んという日だ！ まさか死んだと思っていたぼつちやんに、再び巡り会えるとはっ!」

サンチョは目に大粒の涙を浮かべると、フェズリイをしかと抱きしめた。

「しかも、こんなに大きくなつて……うう、ぼつちやん！ サンチョは、サンチョめは今日ほど嬉しいと思つたことはありませんぞっ!」

「サンチョは少し老けたな」

「二十年ですぞ。老けますとも。ですが、生きてて本当によかつたっ。まさかこういう日がこようとは……」

「サ、サンチョ殿?」

ただ一人、門番だけが事態を飲み込めていない様子だった。

「このお方、サンチョ殿のお知り合いか」

「う、うむ。そうじゃ。この方の身元はこのわたしが保証する。だから、城内に入れては貰えぬだろうか」

「他ならぬサンチョ殿の頼みとあらば、断る理由がありません。さあ、どうぞ」

門番は言われるがまま、城門を開けた。

グランバニアの内部は、ドーム状の建物で覆われていた。透明なガラスのような金属で天井は覆われており、ちゃんと日の光が届く仕組みだ。それでいて、雨風は内部には入らない構造になっている。

街の人々は皆活気に満ちあふれている。治世が行き届いている証拠だった。

「色々とお尋ねしたいところではありますが、ぼつちやん。一つだけ聞かせてください。パパス様は、やはり……」

「ああ」

フェズリイは神妙な顔つきで父の最後を語った。

そして、自分が奴隷として働かされてきたことも。

「そうですか。やはり、パパス様は……うう」

サンチョは主君の無念の死に、ただただ涙する。

「サンチョは、どうしてこの国に」

「あの日、ラインハット兵がサンタローズを襲撃した時の

ことです。私はパパス様とぼつちやんの家を守るために戦いましたが、多勢に無勢。最後には逃げるだけで精一杯でした。失意の中にあつたわたしは、流れるがままに諸国を放浪し、気づいたらこのグランバニアの地に舞い戻っていたのです。ここはわたしの故郷でもありますから」

「そうだったのか」

「そういえば、フェズリイ様。その女性の方は、もしかして」

「あ、ああ」

フェズリイは齒がゆそうな顔をしながら、彼女を紹介した。

「はじめまして。サンチョ様。フェズリイの妻、フローラ・ルドマン・グレンゾーンです」

「な、なんとっ！ ぼつちやんに、こんなかわいい奥様ができるなんて！」

サンチョはこれまでで一番驚いたようだった。

「いやはや、驚きましたとも。まさか、あんなにちつちやかった坊ちゃんに、奥方様が出来たとは……」

サンチョの中では、まだフェズリイは六つの男の子のままだった。

一行は階段を上り、王宮内へと足を踏み入れた。

王宮とは言ったものの、ラインハットのような豪華絢爛さはほとんど見られない。高そうな絵画や美術品もなければ、黄金で作られた燭台やシャンデリアなんかも皆無だ。

だが、フェズリイはそれが逆に好感が持てた。

やがて一行は王の間へと通された。

玉座に座っていたのは、少々頭髪が薄くなった、どこか冴えない王だった。

父・パラスと面影が似ているが、彼にあつた覇気のようなものは感じられない。

「おお、サンチョか。急ぎのようとのことだが、どうしたのかね？」

「オジロンさま、まずは……」

サンチョは近衛兵をはじめとする周囲の者達に目を配つた。

「うむ。わかつた。おまえたち、少々下がっておれ」

「はっ」

オジロン王はサンチョの頼みを聞いて、その場にいた者達を下がらせた。

王の間にはサンチョとオジロン、そして大臣。それからフェズリイ達一行だけが残された。

「サンチョや、その小汚い旅人はいったい何者なのだ」

大臣はいかにも不審そうな目つきでフェズリイを値踏み

するように見た。

その態度に、サンチョは珍しく顔を赤くして叫んだ。

「大臣、無礼な口を控えなさいっ！ ここにおわす方をどなたと心得る！ 先のパラス王の遺児にして、正当な王位

継承者フェズリイ・グレンゾーン・フォン・グランバニア殿下なるぞ！」

「なっ……！」

大臣、そしてオジロンが思わず目を見張つた。

「ま、まさか、そんな、バカな……っ！ で、でたらめをっ」

「でたらめなどではありませぬぞ！ ぼつちやま、お父上の形見の剣をお持ちですね。それを」

「あ、ああ」

フェズリイは言われるがまま、剣を差し出した。

「これは選ばれし王家の者のみに帯剣が許された宝剣。この剣に刻まれたグランバニア王家の紋章が、何よりの証拠ですっ！」

「ぐっ……」

証拠を出されて、大臣はこれ以上ぐうの音も出せなかつた。

「おお、あの時の赤子が、こつちも大きく育つたのかっ

……」

大臣とは正反対に、オジロン王は感激のあまり、玉座か

ら立つと、フェズリイのもとへとやってきた。

「うむ。確かに兄上の面影がある。それにその瞳はまさしくマーサ様の生き写しじゃ」

「オジロン様……」

「フェズリイよ。よくぞ帰ってきてくれた。余はうれしそぞ。今宵は宴を開かなくてはならぬなつ、おう大臣！」

「うつ、そ、そうですな……」

大臣がしぶしぶ頷いた時だった。

突然、フローラがバタツと倒れた。

「フローラッ!？」

フェズリイがハツと我に返る。

まるでチゾツトの時と同じように、フローラは地面に突っ伏したまま、身動き一つしていない。

「いかんっ！ だれか、まいれっ！」

オジロンがパンパンと手を叩くと、控えていた衛兵達がぞろぞろと舞い戻ってきた。

フローラは王族専用の寝室に寝かされ、そこで診療を受けていた。

外で待っていたフェズリイは、気が気ではない様子だっ

た。

やはり、どこか悪いんじゃないだろうか。

もし、フローラに何かあったら……

「ガウ……」

ブックルも心配そうに、このときばかりは猫のようにフェズリイに身を寄せる。

「さあ、もうお入りになつて大丈夫ですよ」

女官の一人が顔を出した。

部屋に入ると、フローラはお姫様が寝るような天蓋付のベッドに寝間着姿で寝かされていた。

「まったく、聞けばチゾツトの村でも一度倒れたとか。あまり無茶をさせてはなりませんよ」

「そ、そんなに悪いのですか？ フローラさ、奥様は」

サンチョがおどおどしながら尋ねる。

「悪いもなにも……おめでたですわ」

「えっ」

その場にいた男達が、皆そろいもそろつてぼかんとした目をした。

「フローラ様のお腹の中に、赤ちゃんがいるのです。お腹は目立つてはいませんが、もうだいぶ育っています」

突然の出来事に、フェズリイはただただ困惑した。

フローラが、懐妊？ でも、たしか子供はできないって。

いや、それよりも、自分が父親になる？

「あなた。ごめんなさい」

フローラは小さな声で呟いた。

それは何の謝罪なのだろう。子供が出来たことへの？

それとも、自分に黙っていたことへの？

「バカだな、謝ることなんかないじゃないか」

フェズリイは微笑すると、彼女の頬に手をあてた。何か声をかけなければ。

でも、なんとさえばいいんだろう。

「その、なんだ。おめでどう、フローラ」

「まあ」

妙ちくりんな会話に、フローラはクスクスと笑った。

「いやはや、それにしても今日はなんとめでたい日だ！」

オジロンが嬉しそうにフェズリイの肩に手を乗せた。

「兄上の忘れ形見が帰ってきたと思つたら、なんと、王子が王女が産まれるというのだ！ これも竜の神の導きによるものだろう。おお、こうしてはおられぬ。国民に、おぬしのことを伝えなくては」

「オ、オジロン様、少々お待ちください！」

先走ろうとした彼を止めたのは、大臣だった。

「そう急ぐこともありませんまい。それに、フェズリイ様も長旅でお疲れの様子ですし」

「そ、そうじゃな。うむ、大臣の言うことももつともじや。フェズリイよ。おぬしもそれでよいな」

「ええ、ありがとうございます」

「うむ。今宵は兄上の話などを聞かせておくれ」

その夜は簡素ながら歓迎の宴が催された。

今は亡きパパスの思い出話などで賑わい、夜は次第に更けていった。

季節は巡る。

フェズリイとフローラがグランバニアへ来て、すでに数ヶ月が過ぎようとしていた。

なぜかフェズリイがパパスの生き残りという事実を公表することを頑なに渋っていた大臣だったが、さすがにいつまでも客人の立場でいさせるわけにもゆかず、フェズリイは正式にパパスの遺児として国民に発表された。

突然身分が王族となつたわけだが、さすがにまだ慣れない。顔が合うたびに衛兵達に敬礼をされるのも妙な気分だった。

服を着るのも、召使いにやつてもらわなければならない。そんなの自分で出来るといっても、それが仕事ですからと頑として譲らない。

（父さんが城を出奔したのも、こういう窮屈な生活に嫌気が差したのかもしれないな）

誰も見ていないことをいいことに襟首を緩めながら、フェズリイは独りごちた。

「これはフェズリイ殿下。ご機嫌麗しゅう」

通路で彼に声をかけてきたのは、ピエールとマーリンだった。

「茶化さないでくれよ、二人とも」

ピエールとマーリンは魔物でありながら、今ではグランバニアの要職についていた。ピエールは王宮兵士達の剣術指南役、マーリンは児童学校の先生だ。

不思議なことに、この国では魔物と人間が共存していた。教会の神父はホイミスライムだし、武器屋の鍛冶を営んでいるのは、ブラウニーだ。

なんでも、フェズリイの母マーサには、魔物を改心させる力があり、ここで働いている魔物たちは皆彼女の手によって善なる存在に生まれ変わった者達だという。

俺のこの力は、母さんゆずりのものだったのか。

その時、フェズリイはそう思ったものだ。

「正直に言ってくれよ。似合っていないだろう？」

「そうですね。ヘンリーと同じくらい似合ってますよ」

「それって、暗に似合っていないって言っているようなもの

じゃないか」

と、フェズリイ。

「そうそう。ヘンリーといえば、頼りの返事が届いたらしいのですが、お読みになりました」

「ああ、今朝な」

グランバニアについて早々、フェズリイは親友であるヘンリーに手紙を出した。そこには簡素に、自分が王子だったこと。妻のフローラが妊娠したことなどを記したのだが……
「手紙で愚痴られたよ。お前が結婚したことも初耳だぞってね」

そういつて、フェズリイは苦笑した。

「それから、二人の間に子供が産まれたそうさ。男の子で、名前をコリンズと名付けたって。先を越されたな」

「そういえば、フローラはどうです？」

「ああ、お腹もすっかり大きくなったよ。もういつ産まれてもおかしくないって」

「楽しみですな。男の子か女の子か」

「ああ」

フェズリイは頷いた。だが、その表情は喜びに満ちている反面、わずかに曇っていた。

「あなた？」

フェズリイが自室に戻ると、フローラが首をかしげている。
「どうかなさったのですか」

「どうって、何が」

フェズリイは優しく聞き返す。

フローラのお腹はすっかり大きくなっていた。もしかしたら双子かもしれないね、と女官が言っていたが、案外本当にそうなのかもしれない。

「何か、考え事をしているようだったのさ」

「……そうだな。子供の名前を考えていたのさ」

「まあ」

フローラはくすくすと笑う。そんな彼女には、プックルが常に付き従っていた。

ここで暮らし初めて以来、プックルはそれまでの態度が嘘のようにフローラのそばに付き、片時も離れようとはしなかった。

女官達も最初は地獄の殺し屋キラーパーンサーを怖がっていたが、今ではすっかり、大きいペット扱いで皆にかわいがられている。

「プックル。お前、少し太ったんじゃないのか」

フェズリイはそういいながら、プックルの顎を撫でた。
『ふんっ、お前に言われたくないぜ』

とても言いたげに、プックルはぶいっと顔をそらした。確かに、旅をしていた頃より、筋肉が落ちたような気がする。

剣の鍛錬は怠ってはいないが、やはり、王宮暮らしは身体が鈍る。そのことはフェズリイも実感していた。

このままでいいのだろうか。

フェズリイは最近、そう思うようになっていた。

フローラのことを思うなら、この国に滞在するのは悪いことではない。

だが、いつまでもここにいるわけにもいかなかった。

母を救い出すという使命のことを、彼は片時も忘れたことはなかった。

その日の正午。

フェズリイはオジロンに呼び出された。

玉座の間に立ち寄ると、そこにはサンチョ、そして大臣の姿もあった。

大臣か。表向き、普通に接してくれているが、彼が自分

のことを好ましく思っていないことは態度からわかっていました。

「おお、来たか。フェズリイよ」

「叔父上、重要な話とは一体」

「うむ。みなも聞いてくれ。わしはこのたび、フェズリイに王位を譲ろうと思うのだ」

「なっ」

一同が一齐にざわついた。

「い、いったい、何をおっしゃいますかっ！」

開幕そう発言したのは大臣だった。

「まあよいではないか。わしは人が良いだけで、王の器ではないのだ。それに、兄上の子が生きていたとなれば、王位継承権は本来フェズリイにあるのは道理であろう」

「ちよ、ちよと待ってください！」

フェズリイも慌てて異を唱えた。

「私はこれまで、自分がこの国の王子であることすら知らずにいました。そんな私が、いきなり王だなんて」

「もちろん、当面の間はわしがおぬしをサポートする。それにわしは、この数ヶ月間、おぬしが国民と友好的に接している様をよく見てきた。おぬしなら、きつといい王になれる」

「オジロン様……」

「わたしも賛成ですぞ！ フェズリイぼつちやんが王位を継ぐ。そのことをパパス様が知ったら、きつとお喜びになったことでしょう」

サンチョもすかさず後押しした。

(そうかなあ)

そのことについては疑問符が浮かんだが、フェズリイはあえて言わなかった。

「おぬしが気にしていることはわかる。マーサ様のことじゃろう。むろん、わしらとてこのままにはしておかぬつもりじゃ。現に今も、世界中に密偵を送り込み、情報を探させておる。おぬしが一人で世界中をあてもなく探し回るよりは、はるかに効率的じゃろう」

確かに、オジロンの言う通りだった。

自分一人では限界がある。それに、もう自分は一人ではない。

フローラがいて、さらにもうすぐ子供が出来るのだ。

二人を放っておいて、旅に出ることは、今の自分にはできそうにない。

「……わかりました。オジロン様」

フェズリイは覚悟を決め、了承の返事を送った。

「おお、受けてくれるかっ！」

オジロンが喜んで玉座から立ち上がった。

その時だった。

「お待ちくださいれっ！」

大臣が異を唱えた。

「オジロン様、お忘れではありませんか。王位を継承するために、王の試練を受ける必要があることを！」

「王の試練？」

「さよう。フェズリイ殿はご存じではないと思いますが、グランバニアの王家を継ぐものは、代々受けなければならぬ試練があるのです。ここより遙か東にある、王家の洞窟へ一人で赴き、最深部に安置されている王の証を手に入れることができた者のみが、王位を継承できるのです」

「し、しかし大臣よ。あそこは昔と違って、魔物が跋扈する魔窟と化しておるのじゃぞ」

「決まりは決まりでございます。オジロン様」

「……わかりました。大臣殿の言うことももつともです。その王の試練に挑みたいと思います」

フェズリイはそう言った。覚悟を決めた以上、どんなことをしても王になるという決意を彼は秘めていた。

「しかし、一人で行くのは危険じゃ。よし、二人だけ従者を付けることを許そう」

「陛下っ！ そんな例外は」

「うるさいぞ大臣！ 国王であるわしに逆らう気か」

珍しくオジロンは厳格な態度で大臣に告げた。

「でしたら、その従者の役目、このサンチヨにおまかせくださいれ！」

すかさずサンチヨが名乗りを上げた。

「このサンチヨ、昔はパス様の従僕として、戦いに明け暮れた経験があります。年老いたとはいえ、足手まといにはなりませんぞ！」

「うむ。サンチヨなら適任じゃ。そして、あと一人じゃが」
「お父様、その役目、私が引き受けようございます」

突然名乗りを上げたのは、妙齢の美女だった。

フェズリイより二歳年下の、長い黒髪の美少女がそこにいた。

彼女の名はドリス姫。オジロンの娘であり、女ながらの剣の使い手だった。

「お兄様、よろしゅうございますね。それとも私では役不足ですか」

「いや」

フェズリイはドリスと一度剣の手合わせをしたことがある。

結果はフェズリイの負けだった。自分の剣はしよせん我流だが、ドリスの剣は洗練された武術の剣であり、その腕はグランバニアでの一、二を争うほどの実力者だった。

「それに、これもいい経験になりますわ」

「やれやれ。誰に似たんだか。ますます嫁のもらい手が悪くなるぞ」

「構いませぬ」

ドリスはきつぱりとそう言い切った。

「そうですか。王様になるために」

出発の前、フェズリイは妻にしほしの別れを告げるために自室を訪れた。

「わたしはあなたの旅についていくことはできそうにありませんしね」

フローラは自嘲ぎみに笑った。それはお腹の子供を理由としていただけではなかった。

もし妊娠していなくても、自分ではどのみち、足手まといになるだろう。そのことは今までの旅でフローラ自身がよくわかっていた。

「ドリスさん。主人をお願いします」

「フローラ様。お任せください」

ドリスはグランバニア式の敬礼で彼女に応えた。

フローラとドリス。二人は性格も正反対で、まるで共通点もなかったが、不思議とすぐに打ち解け合い、今では姉妹といていいほどの間柄だった。

「でもあなた。一つだけ約束してくださいね」

「なんだい」

「この子達が産まれる前には、帰ってきて」

そういつて、フローラは夫の頬に軽く口づけをした。

明朝、フェズリイ、サンチヨ、そしてドリスの三人はグランバニアを出立した。

王家の洞窟は徒歩で一週間ほどのところにあるという。「お懐かしいですなあ。こうしていると、パパス様と旅をしていた頃のことを思い出します」

サンチヨの装備は鉄仮面に鉄の前掛け、そしておおきづちという出で立ちだ。なかなかの完全武装だが、どこか道化つぼさを感じるのはフェズリイの気のせいだろうか。

それに引き換え、ドリスはというと、鋼鉄の剣以外はまったくの軽装だった。彼女曰く、重たい鎧は動きが鈍るため返って邪魔なのだという。

「サンチヨ殿はもうお年なのでから、無理はなさらないでください」

「なにをいいますか、ドリス様！ このサンチョ、老いたりとは言え、まだまだ若いものには負けませぬぞ！」

そういつておおきづちを振り回す。

「どうやら、腕がなまってないかどうか、判断できる時がきたみたいだな」

フェズリイは魔物の気配を感じ取り、形見の剣を引き抜いた。

物陰から姿を現したのは、メイジキメラに石の巨人ストーンマン、死者の怨念が封じ込められたのろいのマスクだった。

フェズリイにとって、久々の実戦だった。

「ドリスはメイジキメラを頼む。その細身の剣ではストーンマンは分が悪いだらう。サンチョはのろいのマスクを。

俺はストーンマンをやる」

「わかりました」

「おまかせくださいさっ！」

三人は一斉に散った。それぞれの標的に相対する。

ストーンマンと対峙したフェズリイはまずはずっと相手を観察した。

あの巨体だ。動きは緩慢なはず。だが、防御力は侮れない。普通に斬っては簡単に弾かれてしまうだろう。

となれば、奴の弱点は……

先に動いたのはストーンマンだった。その巨大な拳をフェズリイの頭上から振り下ろす。

意外と早い。だが、対応できない早さではなかった。

フェズリイは跳躍してそれをかわすと、すばやい動きでストーンマンの身体によじ登った。

巨人はそれを払いのけようと暴れ回る。

それこそがフェズリイの狙いだった。

この辺りの地形は昨日の雨で泥濘んでいる。そんな中、あのような滅茶苦茶な動きをすれば、どうなるか。

ストーンマンははやくも足を泥に捕らわれ、その場に崩れ落ちた。

その隙をフェズリイは見逃さなかった。

ストーンマンの生命の源である魔法石めがけて、剣の切っ先で突く。

「ミ、ミ、ミ」ともろい音が響いて魔法石は碎け散った。

ぐおおおつ、と断末魔の叫びを上げて、ストーンマンはただの動かぬ石像と化した。

「お見事です。さすがですね」

ドリスがパチパチと拍手する。

彼女はすでに戦いを終え、剣を鞘にしまっていた。

その傍らには、真つ二つに避けたメイジキメラの死骸が横たわっていた。

「これはこつちの台詞さ」

メイジキメラごときは、ドリスの敵ではなかったらしい。
その横で……

「くつ、この、このつ！ ええい、ちよこまかとつ！」

のろいのマスク一体に未だ手こずり、おおきづちで地面に穴を開けまくっているサンチョの姿に、二人は苦笑した。

そうして、三週間が経過した。

一行の目の前に見えてきたのは、湖畔の中州にぼつくりと開いた洞窟だった。

入り口には鉄格子が填められており、そこがグランバニア王家で管理されているものだと思われる。

「ここが試練の洞窟です。私も実際に来るのは初めてです」
そう言いながら、ドリスはオジロンから授かった鍵で鉄格子を開けた。

「入り口はこのように閉鎖されていますが、魔物達はどこからか内部に侵入している様子です。それに、どんな仕掛けがあるかわかりません。用心してください」

「ああ」

フェズリイはたいまつに火を灯すと、先陣を切って中へと入った。

洞窟というのが、内部には壁や天井に明らかに人の手が加わっており、さながら迷宮といった感じだった。

内部は入り組んでおり、まるでありの巢のようだった。
フェズリイは迷わぬように地図を作成しながら、慎重に洞窟内を進む。

侵入した魔物自体は、たいしたことはなかった。さすがにフェズリイ一人なら手こずるかもしれないが、ドリスとサンチョという頼もしい仲間がいるため、苦戦することなく切り抜けることができた。

その反面、フェズリイの頭を悩ませたのは仕掛けの数々だった。

ただしいレバーを引かなければ落とし穴にひっかかる仕掛けや、釣り天井に水攻めのトラップ……様々な罠が巡らされていた。

そのどれもがフェズリイ達を苦しめたが、三人は力を併せてそれらを乗り越え、洞窟内を奥へと進んでいった。

「フェズリイ様、はやくつ！」

「ああ、わかっている！」

狭い通路でドリスとサンチョは魔物の群れを食い止めて

いる。その間にフェズリイは祭壇の中央に安置された、驚の形をした像を手に取った。

「これこそが試練の証と呼ばれるものに他ならなかった。

「よし、入手したぞ！」

「し、しかし、多勢に無勢ですぞっ。どうします！」

サンチョははやくも音を上げていた。

魔物は倒しても倒してもやってくる。そして、フェズリイ達にはもう退路がなかった。

ドリスの剣は度重なる戦闘で折れてしまい、サンチョも疲労によりもう満足におおきづちを振るうこともできない。

「リレミトで脱出する！ 俺に掴まれ！」

フェズリイは呪文を詠唱しながら、二人に手を伸ばした。

ドリスとサンチョもなんとか彼の手を取る。

「よし、リレミト！」

呪文が発動し、三人はまばゆい光に包まれた。

光が消え失せた時、すでに三人の姿はどこにもなく、烏合の魔物達だけがその場に取り残された。

「ふう、助かったあ」

サンチョはへなへなとその場に倒れ込んだ。

ここは洞窟の入り口だ。どうやらリレミトの呪文は成功したらしい。

「お疲れ様でした。フェズリイ様。これで誰の反対もせず、晴れて王となれるでしょう」

そうドリスが言った時だ。

「おっと、それはどうかな？」

どこからともなく、声が聞こえた。

気がつくど、三人はならず者達に囲まれていた。

数は十人。みな武装しており、剣や斧を持っている。だが、兵士ではない。その粗暴な感じから、どうやら山賊のようだった。

「な、なんだ、お前達は！」

サンチョが慌てて立ち上がり、おおきづちを構える。

「あなたがフェズリイさんかい？」

山賊の頭らしき男がフェズリイの前までやってきた。

それは筋骨隆々の大男だった。

「俺はカンダタつという、ケチな山賊さ。まあ、あの世までの短い間だが、覚えてくれよな」

やっばりか。フェズリイは悟った。

この男、俺達三人を殺すつもりだ。しかも偶然この場に居合わせたわけじゃない。

「あなたにや気の毒だが、あなたが王様になることで困る人間もいるってこった。悪く思わないでくれよ」

「くっ」

フェズリイは唇を噛みしめた。リレミトの呪文はかなりの魔力を消耗する。今の彼にはこの屈強な偉丈夫を相手に戦えるだけの力はなかった。

「旦那！ こつちの生意気なお姫様もやつちまうんですか
い？」

部下の一人が色めき立つような声を上げる。

「こんな美女をただ殺すのはもったいないですぜ！ せい
ぜい楽しんでからにしましょうよ！」

「……下衆めが」

ドリスは懐に隠し持っていたナイフを構えた。

まさに絶体絶命だった。

その時だ。

「ベギラゴンツ！」

突然、燃えさかる炎が周囲を火の海に変えた。

その火炎放射に数名の山賊達が訳がわからぬ間に炎に包まれる。

その隙をぬって、スライムにまたがった一人の剣士が飛び出した。

残された山賊の部下たちを、次々となぎ払う。

「ピエール！ マーリン！」

フェズリイが歓喜の声を上げた。

二人は颯爽と現れ、フェズリイの元へとせせ参じた。

「大臣殿には内緒ですよ」

「まあ、迎えにいつちやダメとは言われなかったからのう。
だが、結果オーライといったところじゃな」

そういつて、マーリンはにやりとウィンクする。

「ドリス殿、代わりの剣を！」

ピエールが自分の予備の剣を彼女に投げて渡した。

「くっ！ てめえら！ かかれっ！」

カンダタは残った部下達と一緒に、いつせいにフェズリイ達に襲いかかった。

だが、相手が悪かった。

ピエールとマーリン、そして剣を得たドリスの前に、山賊風情の彼らでは手も足も出なかった。

部下達は倒され、ただ一人生き残ったカンダタもあえなく捕縛された。

「た、頼む、命だけは助けてくれっ！」

お縄についた途端、カンダタの態度は急変した。
情けなく頭を下げ、命が助かりたいがために命乞いをしてきた。

「お、俺はただ雇われただけなんだよっ！ あんたを殺せば、大金をくれるって！」

「ほう、誰に頼まれたのかえ？」

マーリンがサデイスティックな笑みを浮かべて、ドリス

のナイフ片手に迫る。

「正直に言わんと、喉笛をかつきつちまうぞ？」

「……やれやれ」

ピエールは肩をすくめた。

「そ、それだけは言えねえ……口が裂けても！」

「ほうほう、なら、喉が裂けるのなら構わんと？」

「い、いいます、いいます！ だから命だけは、お助けおっー！」

カンダタはそういつて嗚咽を漏らした。

「あ、あんたたちを、殺せと命じたのは」

「命じたのは？」

マーリンが聞き返す。

「めい、じ、た、の、わ……」

(ん……?)

フェズリイは片方の眉をつり上げた。

カンダタの様子がおかしい。それまでなんともなかったのに、急にろれつが回らなくなっている。

いや、気のせいではなかった。カンダタは突然、口から泡を吹いて倒れたのだ。

「毒矢じゃっ！」

マーリンがカンダタの後頭部に刺さった吹き矢を見て叫んだ。

「しまった！ フェズリイ、急いでキアリーの呪文を！」

ピエールが叫ぶ。だが、

「ダメだ。もう、死んでいる」

彼の手の脈を取つて、フェズリイは黙つて首を左右に振つた。

「口封じ、というわけですか」

ドリスは周囲の気配を探った。

「そこか！」

木の陰にナイフを投げる。

ガサツと何者かが飛び出た。

「待て！」

ドリスが追おうとするが、

「やめろ、ドリス。今の消耗しきつた君では、返り討ちに
あるのが関の山だぞ」

そう言つて、フェズリイが制した。

「気配も感じさせずにあの距離から正確にカンダタに毒を
打ち込むとは、恐ろしい奴だ。それよりも……」

「ああ、口封じがやつ目的のようじゃな。どうも徒歩で
のこのことグランバニアまで戻っていたら、道中また襲わ
れるかもしれん。こいつで手っ取り早く帰ることにしよう
ぞ」

そういつてマーリンが差し出したのはカメラの翼だった。

「おお、フェズリイよ！ よくぞ王家の証を持って参った」
 グランバニアへ凱旋したフェズリイを、オジロンは歓迎の嵐で迎えた。

「大臣よ、これでおぬしも文句はないじやろう」

「文句とは心外ですな。わしは王家のしきたりに従ったまでのこと。決してフェズリイ殿に他意はございませぬ」

その大臣の反応はフェズリイとしても意外だった。

彼がカンダタを裏で操っていた黒幕とはかり思っていたが、気にしすぎだったか。

「実はな。おぬしが王家の証を取ってくることを見越して、すでに戴冠式の準備は済ませておったのじやよ」

「やれやれ、お父様は相変わらずせっかちですね」

そういつてドリスが肩をすくめた時だ。

「た、大変ですっ！」

女官の一人が慌ただしく玉座の間に乱入してきた。

「なんじや、騒々しい。今大事な話を……」

そうオジロンが言いかけたが、女官は構わず告げた。

「お子さんが……フローラ様が突然産気づいて、もう産まれそうですっ！」

「なんじやと、確かまだ予定日より早いはずでは」

「現在、医師達が対応しておりますが……」

「フローラ！」

「あつ、お待ちください」

フェズリイはいてもたってもいられず、女官の制止を振り切って走り出した。

「あ、あなた……早かったのね、おかえりなさい」

苦痛に喘ぐ中、フローラは夫が帰ってきたことを知ると、そう告げた。

「う、産まれそうなのか」

フェズリイはよほど動転しているのか、当たり前のことを尋ねる。

フローラは返事を返す気力もなく、ただ頷いた。

そばでは女官達が慌ただしく動いていた。

「ほれほれ、もういいじやろう！」

邪魔だと言わんばかりに、年老いた産婆がフェズリイを押し戻す。

「あ、あの……！」

「安心せい。わしはこれまで何度も赤ん坊を取り上げてきたベテランじや！ パパス様も、お前さんの時もな。だからお前さんはどつしりと構えてその時を待っておれ！」

「で、ですが、最後に一言だけ……っ！ フ、フロラッ」
何か言わなくては。そう思うのだが、肝心の言葉が出てこない。

「……待つてるから」

結局、そんな言葉しか思い浮かばなかった。

だが、フロラにとってそれで十分だっただろう。彼女は辛そうながらも笑みを浮かべた。

「はい。元気な赤ちゃんを産みます。だから、待つて、あなた」

あれから数時間が過ぎた。

すでに日は暮れ、空には星々が瞬き始めていた。

フェズリイはというと、椅子に座ったかと思えば立ち上がり、その辺をウロウロしたかと思うと、また椅子に座る。しばらくするとまた立ち上がり……と、そんな一貫性のない行動を繰り返していた。

「まったく、少しは落ち着けっ」

マーリンがたしなめた。

「わかっているんだが……」

「やれやれ、歴戦の強者も、こういう時は形無しじゃな」

「ふふっ、しかし、そうしていると、おぬしが産まれた時を思い出すのう」

と、オジロン。

「兄上も落ち着かない様子じゃったよ」

「父さんも……」

その時だった。

おぎやあ、おぎやあ……！！

静寂に包まれた廊下に、赤ん坊の泣き声が響き渡った。

「おお！ 産まれたぞっ！」

オジロンが立ち上がった。

「さあ、なにをしておる。さつきとゆかぬか！」

彼に背中を叩かれて、フェズリイも待ち焦がれていた扉を開けた。

「おばあさん、産まれたのですか！ フローラは！」

「安心せい。母子ともに健康そのものじゃ」

長い戦いだったのだろう。産婆は額に汗を浮かべていたが、満足げな笑みを浮かべていた。

恐る恐る、フェズリイは部屋に入る。

ベッドに寝ていたフロラが、彼を見た。その枕元には二人の赤ん坊が泣きじゃくっていた。

「あなた。見て。双子の赤ちゃんよ。男の子と女の子」

「あ、ああ」

フェズリイはただただ頷くだけだった。

「その、大丈夫なのか。身体は」

「ええ。それにしても不思議ね。子供はできないと思つていたのに、私の中に、こんなかわいい赤ちゃんが、二人もできていたなんて」

「ああ……」

「あなた。抱いてあげて」

「い、いいのか？」

フローラはこくりと頷いた。

「まだ首がすわつておらぬから、気をつけてな」

「はい」

産婆に促されて、フェズリイはそつと腫れ物を扱うかのようにながら抱く。

あたたかい。

これが、新しい命か。

彼の胸は、これ以上ないほどの充足感に満たされていた。

自分が産まれた時、父も同じ気持ちだったのだろうか。

「あなた。この子達に名前をつけてあげて」

フローラがそう告げた。

「俺でいいのかい？」

「ええ、あなたにつけてもらいたいです」

「ずつと考えていたんだ……」

フェズリイは我が子達を見つめながら言った。

「男の子はコウガ。女の子はリディアと名付けようつて」

「コウガとリディアか。この国に伝わるいにしへの英雄譚に出てくる双子の勇者の名じゃな」

それはパパスがよく子供の頃の彼に聞かせてくれたおとぎ話に出てくる登場人物の名だった。

後々知つたが、このおとぎ話はグランバニアに古くから伝わる英雄譚だったらしい。

「なるほど。次世代のグランバニアを担う若者に相応しい名前じゃ」

いつの間に入ってきたのか、オジロンが満足そうに頷いていた。

「コウガとリディア。素敵な名前。ありがとう、あなた」

フローラはそう呟くと、静かに目を閉じた。

「フローラ？」

「寝たようじゃな。無理もない。御産は初めてだったのじゃからな」

産婆は微笑ましそうに頷いた。

「ありがとう、フローラ」

赤子……コウガとリディアを産婆に返すと、フェズリイ

は每一度妻に感謝の気持ちを伝えた。

翌日。

オジロンは国民に大々的に発表した。

フェズリイ王子に待望の世継ぎが産まれたこと。

そして、自分は退位し、彼に王位を譲ると宣言したことを。

それらの発表は熱狂的な声で迎えられた。

反対するものはほぼいなかった。

皆がそろって、フェズリイ王ばんざい。コウガ王子ばんざい。リディア王女ばんざいと声を揃えて称えた。

熱狂的な国民の声援の中、フェズリイは玉座の間において、正式に王冠を授かり、玉座に座る。

新しいグランバニア王の誕生だった。

その日は宴が催された。

国民達は喜びで満たされ、飲めや歌えのお祭り騒ぎ。

新しく王になったフェズリイも宴の主賓ということ慣れない酒を飲まされていた。

正直、早く解放されてフローラと子供たちの元へ行きかけたが、そういうわけにもいかない。

宴は夜遅くまで続き、やがて、夜が明けた。

「うっ……」

うつらうつらとしていた中、フェズリイは目を開けた。

寝てしまったのか。彼は食卓に突っ伏していた。

辺りを見回すと、誰もが寝息を立てていた。

……なんだ。

フェズリイはその光景に違和感を覚えた。

ある者は床に突っ伏し、ある者はワイングラスを手に取ったままぐったりと床に突っ伏している。

一人二人ならまだわかる。だが、参加していた全員が酔い潰れているというのは妙だった。

そう、まるで眠り薬でも入れられたような……

「まさか……」

嫌な予感がする。

こういう時、彼の戦士としての勘は驚くほど正確だった。

これは何者かが意図的に仕組んだことだ。

彼の背筋に悪寒が走った。

急いでその場を後にして、階段を上り、フローラが待つはずの部屋に戻る。

「なっ……」

そこで見たものは、衝撃的な光景だった。

フローラが寝ているだろうベッドは、もぬけの空だった。そして、部屋内は乱れていた。何者かが争った後か、花瓶は割れ、本棚は倒れ、床は何かで水浸しだ。

フェズリイはそれが血であることに気づいた。

そして、ベッドに倒れている一匹の獣を発見してしまう。

「プックル！」

そう、それはプックルだった。

プックルは無残な有様だった。腹部は裂け、そこから大量に出血している。

「ガ、ガウ……」

彼はうつすらと目を開け、主人を見た。

『すまねえ、まもれなかつた……』

プックルの心の声を、フェズリイはしかと感じ取った。

その時だった。

「お、王様……！」

ベッドの下から、もぞもぞと這い出てきたものがいた。

それはフローラ付きの女官だった。

両手にしっかりと抱えているのは、コウガとリディアだった。

「も、申し訳ありませんっ、突然、窓から魔物が乱入してきて……その魔物がフローラさまをつ」

「なんだって！」

「フローラさまはわたしに赤ん坊を任せて隠れるように言われて……プックル様も賢明に戦ったのですが、多勢に無勢で……も、申し訳ありません」

「あなたのせいではありません。頭を上げてください。むしろ、よくコウガとリディアを守ってくれました」

フェズリイは気を病む婦人を励ます。

「フェズリイ！ こ、これは……」

遅れて到着したオジロンとサンチョが、この惨劇を目の辺りにして愕然とする。

「ぼっちゃん、フローラ様は」

「……連れさらわれた。魔物に」

「な、なんとということだ。これでは二十年前と同じ」

サンチョがガクツと肩を落とす。

「し、しかし、一体誰が、このようなことを」

「ま、魔物達は言っていました。この女をデモンズタワーに連れて行くのが、おれたちの任務だつて」

と、女官が告げた。

「デモンズタワー？」

初めて聞く名前だった。

「デモンズタワーじゃと!?」

ただ一人、オジロンが驚きの声を上げる。

「知っているのですか」

「う、うむ。あれをみよ」

オジロンが窓の外と指さした。

確かに、遠目で塔のようなものが見える。前々から何の塔だろうと疑問に思っていたが、まさかそこがデモンズタワーだったとは。

「かつて、魔王がこの地を支配していた時に使っていた根城じゃ。別名魔王の塔と呼ばれており、魔王が勇者に倒された今は廃墟と化しており、誰も気味悪がって近寄らん」

「ま、魔物は、フェズリイ様を知っているようでした」

女官が恐怖で震えながら言った。

「俺を、知っていた？」

「え、ええ、魔物はこうも言っていました。お前の大切な妻は預かった。返して欲しくば、デモンズタワーまで一人でこい、と」

「ご婦人。その魔物はなんといいました。名前はわからなくてもいい。どういった格好をしていました」

「は、半獣の馬です。白い毛並みの、ひどく獯猛で、ずる賢い顔つきをしていました」

その特徴だけで、フェズリイは悟った。

それと同時に、怒りがこみ上げてくる。

忘れもしない。その特徴の魔物を、俺は知っていた。

「……ジャミ！」

彼は行き場のない怒りを壁にたたきつけた。

フェズリイは一人、戦いの準備を進めていた。

「本当に行くのか、一人で」

オジロンは何度も止めた。

フェズリイはもう王となった人間だ。自分一人の身体ではない、と。

だが、こればかりは頑として首を縦に振らなかった。

「ジャミは父、パパスの仇の一人なのです。それに、やつは一人でこいといった。仲間を引き連れていけば、最悪、フローラは……」

「し、しかし」

「止めても無駄じゃよ、先代王」

マーリンが言った。

「こうなったら、誰もフェズリイを止めることはできん」

「マーリン、ピエール。留守を頼む」

道具袋に荷物を詰め、最後に剣を背負うと、フェズリイはかつての仲間こそう告げた。

「わかりました。幸い、ブックルも命に別状はありません」

でした。口惜しいですが、私達はあなたがフローラを連れ帰るのをグランバニアでお待ちしています」

と、ピエール。

「フェズリイ様」

ドリスが彼に詰め寄る。

「ドリス。コウガとリディアを頼む。もし方が一、俺が戻らなかつた時は、その時は君が二人を守ってくれ」

「フェズリイ様っ、そんな弱気な！」

サンチョが悲痛な叫びを上げる。

「……わかりました。その時は、このドリスめが、お二人を命にかけてもお守りします」

ドリスはフェズリイの覚悟を悟ったのだろう。彼の望む

返事を返した。

「ありがとう」

満足げに頷くと、フェズリイは女官に抱かれているコウガとリディアに目をやった。

赤ん坊は無邪気にすやすやと寝ていた。

「元気でな、二人とも」

我が子にそう告げたフェズリイは、一人旅だった。

「うっ……」

フローラは暗闇の中、意識を取り戻す。

ここは、どこだろう。

私は確か……

そうだ。

意識が急にはつきりと覚醒する。

ブックルちゃん……！

フローラはあの夜、自分を魔物から守って傷ついたブックルの姿を思い出した。

キラーパンサーの治療をしようとして飛び出した時、魔物に当て身を食らって気絶したのだ。

とすると、ここは……

「ようこそ、フローラ嬢。我が居城へ」

そこにいたのは、骨で出来た玉座に座る魔物だった。

それは上半身が馬で下半身が人間の化け物だった。

ぎらついた目が、暗闇の中でも鈍く光っている。

「あ、あなたは、何者ですかっ！ なぜ、わたしを」

「お初にお目にかかります。わたしの名はジャミ。光の教団の幹部ゲマ様の片腕です」

「光の教団……!?!」

「さよう。教団の名前はフェズリイから聞いていますか。

「ならなぜあなたがわらわれたのか、その理由もおおよその検討はつきましますまい」

「……っ」

フローラはキツとジャミを睨む。

「おお、怖い顔だ。美しい顔が台無しではありませぬか」

ジャミは玉座から立ち上がると、フローラのもとへ歩み寄る。

「近寄らないでっ！」

フローラは叫ぶが、ジャミは構わず彼女の元へと近づいた。

「もちろん、あなたは餌です。フェズリイをおびき寄せるためのね。あなたたちの動向は、つねに我々の情報下にあつたのですよ。最初はとるに足らない存在だと舐めていました。だが、グランバニアの王となつたのがまずかつた。一国の王ともなれば、我々に対抗する力と権力を持つことになる」

「だから、フェズリイさんを殺そうというのですか」

「ええ。まあ、私はこういう回りくどいことは嫌いなんですけどね。ゲマ様も相変わらず、真綿を締めるようにいたぶるのがお好きなようで……！」

ジャミはフローラの衣服を掴むと、ビリビリと破き捨てた。

「いやあつ！」

「ふむ。さすがに処女膜はないか。やつとやることはやっていたようですな。まあ、わたしにはどうでもいいことだが」

フローラの美しい裸体を見て、ジャミは舌なめずりをした。

「近寄らないで！ けだものっ！」

「ふふふ、実にいいですな。その態度がいつまで持つか……」
ジャミの下腹部に備わる、凶暴な塊がフローラにはひどく恐ろしいものと思えた。

ジャミは逃げようとするフローラの顔をひっぱたくと、逃げられないように上から覆い被さる。

「いや、やめてっ！」

「叫んでも無駄だ。どおれ……ほう、恐怖のあまり、濡れているではないか。これでは準備はいらぬな。処女でないのが惜しいが、まあよい。すぐわたしぬきでは生きられない身体にしてやる」

「……っ！」

ごめんなさい。あなた。

フローラは覚悟を決めた。

この魔物に弄ばれるくらいなら、自ら死を選ぶほう、と。舌をかみ切ろうとした、その時だった。

「ぬおおおっ！」

怒声と共に、走り込んできた男が、ジャミに飛び蹴りを食らわせた。

たまたらず、ジャミは吹っ飛ぶ。

「汚い手でフローラにさわるんじゃない、ジャミッ！」

そこにいたのは、フェズリイだった。

「なっ、なんだとっ……！」

ジャミは驚愕の顔をした。

「ま、まさか、もう上がってきたというのかっ！ キメーラは、オーク達は!?」

「全部倒したさっ！」

フェズリイは叫びながら、フローラを抱きかかえる。

よかつた。間一髪、間に合つたようだ。

もちろん、彼とて無傷というわけではなかった。

ジャミが配置したキメーラとオークとの戦闘は、熾烈を極めた。

その様子は、彼の背中から流れる大量の血で明らかだった。

「ふ、ふふふふつ、なるほど。妻を思う心が、おまえに実力以上の力を発揮させたということか。愛のなせるわざ、とでもいうのかな」

ジャミは茶化すように言う。

「ジャミ、ここであつたが百年目だ。父さんの仇を討たせてもらうぞ！」

「ふっ、できるかな？ お前に」

ジャミは立ち上がると、その身体に不気味なオーラをまとい始めた。

「さつきは油断していたがゆえに不意打ちを食らつたが、二度目はないぞ」

「うおおおっ！」

フェズリイは形見の剣を構えてジャミに向かつて突進した。

だが、彼の斬撃はジャミのオーラにはばまれ、弾き飛ばされてしまう。

「ば、ばかなっ！」

フェズリイは諦めずに、二度三度剣を振るつた。

だが、結果は同じだった。

「バリアがあるというのかっ！」

「くつくつく、これぞゲマ様より授かつた暗黒結界の力よ！ この闇のバリアがある限り、貴様は指一本俺に触れることすらできるのだ。死ねえっ！」

ジャミはメラミの呪文を放つた。

この塔を登ってくるまでに、数々の戦いで疲弊したフェズリイに、その呪文を避ける体力は残っていないかった。

メラミをまともに食らい、彼は地面に転げ回る。

「あなたっ！」

フローラは悲痛な叫び声を上げて、夫に駆け寄り、ペホイミの呪文で炎を掻き消す。

傷は癒えたが、フェズリーの体力は限界だった。

「フローラ、離れる……っ。君まで、巻き添えを食うぞ」

「いえ、あなた。死ぬときは一緒ですわ」

フローラは立ち上がると、ジャミに向けて両手を広げた。

これ以上はやらせない、という意思を込めて。

「美しい夫婦愛だ。よかろう。わたしのものにしようと思っ

たが、興が冷めたわ。二人仲良く、あの世にいくんだなっ」

ジャミを大きく息を吸い込んだ。

自分の吐く氷のブレスで、とどめを刺してやる。

「絶対零度の冷気で氷付けとなるがいい！」

ジャミはごごえる吹雪のブレスを二人めがけて吹きかけ

た。

だめだ、やられる……っ！

フェズリーが覚悟を決めた時だった。

フローラの身体から放たれた不可思議な光が、そのブレスをはじき返したのだ。

「な、なんだとっ!？」

ジャミが驚愕する。

フローラの身体から、神々しいまでのオーラがあふれ出ていた。

「ジャミッツ！」

フローラは無意識の右手をジャミに向ける。

彼女のオーラは、光の波動となつてジャミの身体を覆つた。

それは彼がまどつていた闇のオーラをも掻き消してしまつた。

「ばかなっ！ ゲマ様から頂いたバリアが、いとも簡単につ！

おまえは、まさかっ……っ！」

「うおおおっ！」

その隙を、フェズリーは見逃さなかった。

形見の剣でがら空きになったジャミの胴体をなぎ払った。

ズシャアッ！

渾身の力を込めた一撃は、ジャミを真つ二つに引き裂い

た。

勝負はついた。

いくらジャミといえども、上半身と下半身を真つ二つに引き裂かれては、絶命は時間の問題だった。

「はあ、はあ」

フエズリイは荒い息をして、剣を杖に見立てて立っているのがやっとだった。

こ、これで、仇は取れた。

三体のうちの、一体だけだが。

「あなたっ……」

フローラが駆け寄る。フローラは一糸まとわぬ姿だったため、フエズリイは自分のマントを彼女に羽織った。

その時だった。

「ふふふふ……」

ジャミが力なく笑った。

「ま、まさかな。この女が、勇者の子孫だったとは」

その発言はフエズリイを驚かせるに十分だった。

だが、そうでなければあのフローラの身体から出た力は

説明ができない。

「勇者は高貴なる血から生まれる。なるほど、ミルドラス様の予言は、本当だったということか」

「ミルドラス？」

それは初めて聞く名前だった。

「た、たしかに俺は負けた。だが、おまえたちを生かして

返すわけにはいかぬっ！」

ジャミは最後の力を振り絞ると、短く呪文を唱えた。

まずい、何かする気だ！

フエズリイがとどめを刺そうとする。だがそれより一瞬早く、ジャミの身体から大量の煙が吹き荒れだした。

「なっ……！！ ごほごほっ！」

突然のことに対応できず、フエズリイはむせ返る。

煙を振り払おうとするが、どういふことだ。腕が動かない。

「なっ……！！」

愕然とした。

身体が動かないのは無理もなかった。身体がじよじよに石化し始めていたのだ。

「あなたっ！」

それはフローラも同じだった。彼女の暖かいぬくもりが、急速に失われていく。

「くっ……！！」

せめて、とフエズリイは手を伸ばした。だが、指先がフローラに触れる寸前で、完全に石となる。

「くくくくく、石となって、この世の終わりを見届けるのだなっ……！！ ゲマさま、あとは、お願いしますっ……ぐふっ」

ジャミは咯血して、今度こそ本当に息絶えた。

その後。

いてもたつてもいられず、オジロン王はデモンズタワーに兵を送り出した。

自らも先陣を切つて塔に乗り込んだが、そこに残されていたのは道中で発見したグランバニア大臣の変わり果てた遺体。そして、頂上の玉座の間には、ジャミの死体が転がっているだけで、フェズリイとフローラの姿はどこにも見当たらなかった。

彼らはいつたい、どこへ消えてしまったのか。

……それから、八年の歳月が過ぎた。

少年は朝の日差しを浴びる中、旅支度を調えた。母親譲りの青い髪に、父親譲りのまつすくな瞳。

そして、彼の背中には不釣り合いに見えるほど立派な剣があった。

天空の剣。

この世で彼だけが扱うことができる剣だった。

少年は未だ、自分の両親の顔を知らない。だが、ドリス姉さんは言っていた。

二人は必ず生きている、と。

「おにいちちゃん！ もうみんな待つてるよ！」

階下で妹の叫び声が響く。

やれやれ、相変わらずせつちかだな。

少年は苦笑すると、玉座の間に安置された剣を手にとった。それはデモンズタワーにただひとつ残された、父の形見の剣だった。

「行ってきます。そして、待つててください。お父さん、お母さん」

少年、コウガは剣にそう語りかけると、剣を元の場所に戻す。

そして彼はきびすをかえして歩き出した。

まだみぬ両親に会うために。

第二卷
終わり

白い薔薇と悠久の風 第二巻

発行日 2022年7月3日

著者 藤枝たろ
<https://www.pixiv.net/member.php?id=2043998>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
